

〔書評〕

浪川健治編

『十八世紀から十九世紀へ』

―流動化する地域と構造化する世界認識―

木村 直也

本書は、三人のベテラン研究者と、三人の気鋭の若手研究者の論考からなり、それぞれの論考が力作で、充実した内容になっている。本のタイトルはいかにも漠然としているのだが、本書を読んでみれば、このタイトルが本書の趣旨の本質的部分を端的に表していることがわかる。通読すると、良い意味での「満腹感」が得られる良書である。以下、各論考の紹介をしつつ、評者のコメントを加えていく。

本書を編集するにあたって

浪川 健治

まず冒頭に、編者浪川健治氏による標記の文章が置かれ、本書を編むうえでの考え方と各章の概要が示される。編者は、存在様態の変化を歴史的に捉えるときに必要となる「時間」と「空間」について、それらは「人間の生きる「場」として存在し、人間の生活や生産、知識や認識に重層的な基底性と変化のモメントを与える」とする。とくに前近代では、人間の生活を刻み、営みの「場」であったものは地域としてあらわれ、近世日本では封建領主の政治支配単位を越えるものであったとした

うえで、封建的割拠を越える労働力＝民衆移動に注目する。十八世紀後期にはロシアの北東アジア進出も加わり、列島の北域、列島内の各地域で労働力＝民衆移動が繰り返され、十九世紀に入ると資本主義諸国の接近により対外関係は変質し、世界認識の構造化が進んでくる。本書はこのような視点から、「十八世紀から十九世紀への展開を、地域社会の変質と対外関係の変化のありようとその意味から考察」し、「それらを意識し認識することによって生まれた「知」的営為に考察を及ぼす」と述べられている。

やや抽象的な文章だが、本書全体を読んで改めてこの文章を読むと、本書編集の趣旨がよく理解できよう。

第I部 列島北域の異文化受容と「同化」

1 北奥社会の変容と海峡地域の形成

―人・ものの海峡往来を通して―

瀧本 壽史

まず、津軽海峡は分断の海峡ではなく、松前・蝦夷地とを結ぶ海上往來の動脈であったことを確認し、弘前藩・盛岡藩の指定湊による統制の体制が、十八世紀には「抜荷」「隠積」といった行為により動揺していたことを明らかにする。そして、その動揺が北前船の活動と関連していることを、奉納された船絵馬・仏像・石造物などから示し、十八世紀後半以降の、藩権力が把握しきれない新たな海峡往來の展開を論じる。蝦夷地の商品生産地化と場所請負制の展開により、北奥民衆が「松前持」^{かせぎ}として蝦夷地に入り込み、それは主たる生業として構造化していた。さ

らに、蝦夷地警備によって諸士の往来や物資輸送に関わる民衆負担が増加し、盛岡藩領・弘前藩領で一揆が頻発し、民衆による抵抗により藩領域を超えた地域的結合^Ⅱ地域認識が強固なものとなっていた。ついで、弘前・盛岡藩による下北・津軽半島沿岸部の本州アイヌに対する同化政策が本格的に展開されるのは、外圧に起因する蝦夷地内国化によると述べる。そして、蝦夷地産物はアイヌ文化として強く認識されず、蝦夷地渡りの産物として受容する認識が生じたとし、その例として蝦夷錦が仏具などとして残り、アイヌ衣料のアットウシが和人社会の労働着として定着したことを挙げる。本稿のまとめとして、海峡地域が国家・民族を超えた交流・歴史的展開を体現する場であり、ローカル化とグローバル化の同時進行の地域として捉えられるとする。

本稿は、丹念な実証を織り込みつつ、近世後期における内憂外患という変動の中で、民衆の活動により藩領域を超えた海峡地域としてのまとまりが形成されるという、大きなパースペクティブを提示している。その前向きな評価については評者も同意するが、さらに本州アイヌを同化しつつ、中央集権的な明治政府のもとで当該地域が辺境^Ⅱ開発対象地と位置づけられていくこととの関連を合わせて考えると、いっそう考察が深まるのではなからうか。なお細かいことだが、アイヌに関する民事事件において内済が認められていたことについて、「異民族として、一つの社会集団として認識され把握されていたことの証左」(五二頁)とされているが、江戸時代に内済は一般に広く行われており、本州アイヌとして独自の形であったのか、今ひとつ読み取れなかった。

2 津軽アイヌは宝暦六年に「同化」されたか ―近世における少数民族集団 (ethnic group) の歴史的位置― 浪川 健治

本稿は、弘前藩における「狄」(本州アイヌ)とその「同化」(本稿では「狄」身分の否定、「狄村」の消滅を意味する)の実態について考察したものである。弘前藩では、宝暦六年(一七五六)年に乳井貢が外ヶ浜を巡視したときに津軽のアイヌを「人間」に取り立て、「同化」したと語られ続けた。しかしそれは「国日記」などの藩政史料には記されておらず、諸史料を分析した結果、宝暦六年時点で「狄」の百姓身分への組み込みが行われたとは考えにくく、アイヌの風俗が「正民同様」になっていたとはいえ、その後も「狄」としての扱いや儀礼行為は存続していたとする。ではなぜ宝暦六年に「狄」支配が停止されたとされ、伝承として語り継がれたのかについて、同年に「生死之者」の改めが施行され、それまでの宗門改にかわる新たな人身把握が開始されたことにより、それが外ヶ浜を巡視した乳井貢の施策と結びつけられたと結論付ける。そして、「狄」の風俗が表面上は失われつつも、「狄」支配は形を変えながらその後も続き、文化三年(一八〇六)に至って「正民同様」に取り扱うことになった。対外的緊張と蝦夷地の「内国」化が進むなかで弘前藩でも「狄」の身分を否定することになり、その存在の明確化を避けるため「狄」支配停止は周知されず、すでに宝暦六年に「狄」支配が停止されていたのだという伝承が語り続けられたとする。

本稿は、これまで長い間にわたって語り継がれてきた宝暦六年の「同化」の事実を否定するもので、意欲的かつ画期的な論考であるといえよう。諸史料を精緻・厳密に分析したうえでの結論であり、説得力に富む。

ただ、なぜ乳井貢が「狄」支配を停止したと近世後期の人々が認識したのかについて、宝暦六年の新たな人身把握に引きずられた単なる事実誤認によるのか、あるいは何か積極的・意図的な意味づけがあったのか。現状では史料の限界があるとは思いますが、欲を言えばもう少し説明がほしいところである。

第Ⅱ部 民衆移動と統合の論理

1 労働力移動をめぐる過渡期としての文化・文政期

―文政期元結一件から見る松代と飯田― 速渡 賀大

まず、飯田藩・松代藩に関わる先行研究が、他地域との相互の影響について踏み込みに欠けるとし、本稿では地域間のつながりに分析の比重を置くとする。文政二年（一八一九）の史料から、飯田藩では他領から借屋人が流入して商品生産に携わる一方、松代藩が飯田領から元結職人を引き抜いて生産を始めようとし、紙漉の技術の流出も懸念されたことを示し、飯田領内の新興在方商人が職人流出に関わっていたことを指摘する。次に、飯田から江戸へ元結・水引を送る権限をめぐる文政五年の争論の史料を分析し、裁許により在村商人が城下商人の「支配」下に入るよう指示されたが、すでに在村商人や借屋人が元結商売の発展を支えていたとする。松代藩は文化・文政期に商品生産に向けて活発な動きを示し、元結を特産物候補とし、また御用商人の八田家で働く奉公人平兵衛は、「他所者」でありながら情報獲得などで能動的な役割を果たしていた。そしてこのような労働力移動の活発化に対して、松代藩・飯田藩

が規制を加えようとしつつも、天保期にかけて現状を認めていくことを明らかにし、文化・文政期が過渡期であったと位置づける。

本稿は史料を博搜し、単一の藩に留まらず、他地域との交流・労働力移動に注目しつつ、近世後期の変化の解明に意欲的に取り組んだ論文である。著者も課題としたように、さらに広く他地域との関連を追究する必要があるが、本稿の事例だけでも当該期における商品流通の展開とそれに伴う労働力移動の一端が示されている。評者が気になった点として、まず、本稿では松代藩の元結生産が失敗に終わったと結論付けている（一三九頁）が、同藩の妻科村の史料だけから結論付けるのは難しいのではないか。さらに著者は、松代藩の「日記繰出」に掲載されている人馬賃銭割増記事をもとに、同藩産物の流通ルートとなる街道の動向に注目した情報収集であるとする（一四六頁）が、この掲載記事について、幕府による人馬賃銭割増指示のすべてではなく、松代藩産物の流通ルート関連だけを抜き出して記録したという検証が必要ではなからうか。江戸幕府日記（「柳営日次記」「年録」など）に掲載されている人馬賃銭割増記事と突き合わせてみるとよい。

2 大名巡見時における上級家臣との関係

―萩毛利家における「御国廻」を事例に― 根本みなみ

本稿は、地方知行制を採る萩毛利家において、上級家臣の領地に大名が訪問することの意義とその影響について検討したものである。萩毛利家では近世初期から、初入国した大名が領内を巡見する「御国廻」が行われてきたが、行程上に領地をもつ上級家臣は「家」を挙げて対応した。

寛保二年（一七四二）に行われた六代当主宗広の「御国廻」では、三末家や岩国吉川家、須佐益田家への下賜に関する出費が削減された。阿川毛利家は、宗広の宿泊場所を自らの田屋（在郷住宅）にするよう申し入れ、須佐益田家が田屋への大名宿泊時に献上・拝領を許されているのに対し、そうした費用増大を伴う格式の変更を要求するものではないとすることで、阿川毛利家への田屋宿泊は許可された。その後「御国廻」は実現しないが、湯治、寺院拝礼、「御船召初」などに伴う大名の巡見は行われ、その際に大名は民衆とも接触し、臨時の立ち寄りという形で家臣の領地を訪問する場合もあった。幕末期の巡見には、海防にかかわる視察が目的に加わる。嘉永五年（一八五二）の北浦巡見のときに敬親は須佐も訪問したが、須佐益田家の田屋を萩毛利家が借り上げる形を取り、須佐益田家からの献上も行われなかった。しかし須佐益田家は萩毛利家側と相談しつつ、かつての「御国廻」に準じる形で準備し、敬親の好む物を用意して「御内献上」を行い、「家」の格式を保とうとした。これらを踏まえて著者は、大名による領地訪問は、家臣の「家」のあり方に密接に結びついていたと結論付ける。

本稿では大名の領内巡見の実態、とりわけ最上級家臣の対応について詳細に明らかにしている。読者が新たに得られる知見も多い。ただ上級家臣の「家」のあり方に関してはいささか具体的な説明がなく、もう少し根源的な考察・言及があってもよいのではないか。また著者も今後の課題としているが、大名の巡見や上級家臣らの対応が、家臣団内部でどのように影響したのかを検討することが望まれるし、さらに領内の民衆がどのように受け止め、いかなる意味をもったかについても考察を広

げると、大名巡見のより豊かな意義が明らかになるのではなからうか。

第Ⅲ部 構造化する世界認識

1 大槻平泉の対外認識 ―『経世体要』にみる内憂と外患―

阿曾 歩

まず著者は、各地を遊歴したのち仙台藩の養賢堂の学頭となり、学制改革を推進した大槻平泉についての先行研究と彼の生涯について紹介したうえで、文化三年（一八〇六）の自序がある『経世体要』について論じていく。同書は匿名で書かれ、国の成り立ち、天皇、学問、政治体制、海防など多岐にわたるテーマが盛り込まれている。著者は、平泉の「守禦」の認識をもとに、「内憂」と「外患」に分けて分析する。「内憂」としては、平泉は中国を尊んで「皇国」を蔑む学者たちの存在を憂いているが、著者は近世知識人たちの華夷意識を紹介しつつ、平泉は「世界を知り、中国が相対化されることによって強まった、自国中心主義ともいふべき考え方」（二二〇頁）であり、「皇国」の「国体」を知り、その根幹である「皇統」を重視し、講究し、守護せねばならないと説いた」（二二六頁）とする。ついで「外患」としては、平泉が長崎でレザーフ来航を間近で見ても幕府の対応を批判し、日本国全体が海防の備えをしなければならぬと主張し、そのための「制度」（「外備え」「内備え」）の整備、「封建制」の利点、「時勢」をみる必要、海防訓練としての捕鯨などを論じていることを示す。最後に著者は、平泉の「実学」的側面のみならず儒学的側面も重要であると指摘する。

本稿は、注目されてこなかった大槻平泉と『経世体要』について丁寧に分析したものであり、当時の知識人ならではの特徴を明らかにしている興味深い。なお、著者は二三四頁で北方防禦のための「参勤交代の制度の導入」に触れているが、ここでの「参勤交代」の用語使用には違和感があり、説明がほしい。また、平泉が明示していない「内憂」と「外患」に分けて分析しているが、「内憂」の中身が今ひとつ明瞭ではないように思われる（「皇国」を蔑む学者たちについては説明）。近世後期には「内憂外患」が問題になり、松平定信や徳川斉昭らの著述では、「外患」に對置される「内憂」は一揆・打ちこわしを中心とした社会不安を指しているのだが、平泉の認識はどうなのか。さらに『経世体要』の文章には、他の思想家と同じような言説もみられる。神道とともに儒教も重視したという平泉特有の側面は指摘されているが、どのような人たちの影響を受け、平泉独自の認識はどこかについてももう少し切り込むと、より『経世体要』の意義が明らかになるだろう。

2 馬場為八郎の『魯西亜来聘紀事』について

楠木 賢道

本稿は、長崎の阿蘭陀通詞の馬場為八郎が記した『魯西亜来聘紀事』の内容、執筆背景を論じたものである。まず、近世後期に福居芳麿が奇書珍本類を書写した『嶺谷叢説』の所蔵状況を紹介し、そこに『魯西亜来聘紀事』が収録された経緯を明らかにする。馬場為八郎は文化元年（一八〇四）に長崎でレザノフ来航に対処し、その後フヴォストフらが樺太・択捉島を襲撃すると文化四年に江戸出府を命じられ、江戸では高橋景保のもとでオランダ語書籍からロシア関係の内容の翻訳に当たり、

さらに翌年にはソウヤ出張を命じられた。馬場はこの間に『魯西亜来聘紀事』をまとめ、帰路に箱館で会った坂東鴻さかとうこうがこの書を写し、のちに福居芳麿が江戸で坂東鴻からそれを借りて模写したのであった。そして本稿著者は、『魯西亜来聘紀事』の各部分の内容を丁寧に分析・解説していく。同書は、レザノフへの御諭書、ロシア国書和解、世界航路や各国の船幟、ロシアやオランダの船図・旗図、韃靼地図・地理書和解、ロシア・清朝間の通商、ランゲの中国旅行日記の和解、レザノフとの応接時の雑話・見聞、ロシアの国営施設の解説からなっている。とりわけロシアと清の関係に関する記事を訳出しているのは、日本とロシアの通商関係樹立を考えていたからだと著者は推定する。編まれた背景としては、レザノフに対し阿蘭陀通詞らが通商実現を幕府に働きかけると伝え、ロシアによる樺太・択捉島襲撃を経て馬場が江戸・ソウヤに派遣され、その前後でロシア関連情報を収集したという事情がある。最後に著者は、レザノフ来航の際の阿蘭陀通詞たちの外交経験が写本という形で受け継がれ、幕末の幕府外交に活かされたと指摘する。

本稿は、『魯西亜来聘紀事』の内容を具体的に明らかにしているだけでなく、同書編纂の背景と結びつけながら、グローバルな視点から論じている。この時期には志筑忠雄がケンペルの「鎖国論」を訳出し（一八〇一年）、その後徐々に「鎖国」概念が広まっていくのであるが、一方では本稿で示されたように、十九世紀初頭の阿蘭陀通詞たちが、ロシアに対する清朝と幕府の対応の違いを認識し、積極的にロシアとの通商を考慮して情報収集をしていたのである。こうした動向が伏流していたことが、幕末の展開につながるであろう。

全体として

まず技術的なことだが、一部の論考には地図が付いているものの、細かく地名が出てくる場合、地図と難読地名のルビがあるとわかりやすかった。それから一部の論考での引用史料について、いつ、誰が誰に對してどのような状況で書いたものか、もう少し説明をしてけるとありがたい部分があった。

本書の六本の論考は、I～Ⅲの各部内での親近性はあるが、全体としてはそれぞれ独立性のある論考である。しかし本書を通読すると、近世後期、すなわち十八世紀から十九世紀への移行期の意味を考えることへと誘われる。しかもそれは、その後明治維新を経て近代国民国家が成立するという単線的な認識ではなく、多様な歴史的存在を前提にした考察である。そのことに関して、いくつか指摘しておこう。

まずは「境界」の捉え方である。この時期はロシアとの間で国境が引かれる方向に向かうが、国境や藩境を超えるような、必ずしも国家に回収されない、流動化する地域の動向が確実にある。第Ⅰ部では「列島の北域」という表現が使われ、海峡地域の多様な民衆の動きと、権力側の規制との関係が論じられる。また第Ⅱ部では、藩を超える民衆の移動や領内での大名の移動から、当該期の社会の変動を示す。第Ⅲ部では対外的契機による新たな世界認識の獲得を明らかにするが、それは国家の枠組みを強化する方向と、国家・民族を超えた認識により通商を志向する方向という、相反する方向性で構造化されることが示される。

本書では、それほど有名ではない民衆・知識人にスポットを当てている（根本論文はあまり論じられない上層武士の家の動向を紹介）。かつては民衆をとりあげるにしても、一揆・打ちこわし・村方騒動に参加する「闘う民衆」が高く評価された。しかし、本書では日常的な生活・生業を営む「闘わない」民衆に重点が置かれ、彼らの動向が権力の支配のあり方を揺るがしていることが示されており、それが幕末維新期の変動・変革につながっていくことを示唆している。第Ⅲ部の知識人たちの認識についても、同様のことが言えよう。

さらに対外関係と国内変動との関連である。第Ⅲ部では両者の直接的な関連が論じられるが、第Ⅰ部・第Ⅱ部ではロシアの接近や海防強化の動向が、地域における移動に関わっていることが示される。この時期には「鎖国」概念が生まれてしだいに浸透していくと同時に、新たな地域の流動化と、対外的な刺激による世界認識の構造化が進み、従来の幕藩体制・四力国限定の外交体制を突き崩していくことで維新変革を迎える。本書は、以上のような大きな展望と、近世後期の意味を改めてじっくり考えさせてくれる一書である。多くの方々に読まれることを期待したい。

（A5判、二一〇頁、清文堂、二〇二一年二月二八日発行、本体価格
八二〇〇円＋税）

（きむら・なおや 元立教大学特任教授）